政治思想学会会報

JCSPT Newsletter

第10号
2000年4月

目　　次

書　評

古き日本のアルカディア——熊澤蕃山研究における新たな達成

書評　James McMullen, "Idealism, Protest, and the *Tale of Genji*: The Confucianism of Kumazawa Banzan (1619−91)" (Oxford University Press, 1999)

苅部　直（東京大学）……1

維新革命の可能性と現実——書評：伊藤彌彦著『維新と人心』（東京大学出版会、1999年12月刊、本文281頁、索引8頁）

平石直昭（東京大学）……7

書評への応答

川出良枝「自由な討議と権力の不在」（本誌9号）に付して

木庭顕（東京大学）……13

第七回（2000年度）政治思想学会開催のご案内……15

論文公募のお知らせ（学会誌『政治思想研究』編集委員会）……18

古き日本のアルカディア——熊澤蕃山研究における新たな達成

書評　James McMullen, "Idealism, Protest, and the *Tale of Genji*: The Confucianism of Kumazawa Banzan (1619－91)" (Oxford University Press, 1999)

苅部　直

理想主義・抵抗・『源氏物語』。本書の表題に掲げられたトリアーデから、読者はまず何を想像するだろうか。これが徳川思想史の研究書であると見通せる人は、おそらく少ないはずである。東京都内のある洋書店では、古典文学の棚に、『源氏物語』の英訳書と並べて置かれていた。そのことはありふれた誤解としても、奇異な印象を誘う題名であることは否めない。だが、いったん読了すれば、この特異な表題は、本書が切り開いてみせる熊澤蕃山研究の新たな地平を、そのまま示すものだと判るだろう。『源氏物語』に描かれたかつての宮廷世界を理想として、それを拠点に現実の徳川社会に対する抵抗を、政策の提言と実行、著述と教育の活動を通じてくりひろげた儒学知識人。——それが、ここに語られる熊澤蕃山（1619－91）の姿である。

著者、（イアン・）ジェームス・マックマレンは、1939年生まれの英国の日本史学者であり、儒学思想の研究で夙に知られ、現在はオックスフォード大学でペンブローク・コレッジの教授（tutorial fellow）を務めている。すでに70年代から熊澤蕃山研究に着手し、いくつかの論文を発表しているが、本書はその集大成と言ってよい(1)。五六二頁にわたる大冊である。

熊澤蕃山に関しては、朱子学と陽明学の「道」に立脚しながら、中国と日本との風土（「水土」）の違いを認めて修整を加え、徳川初期の習俗と社会状勢に適した「法」を柔軟に案出した思想家という理解が、従来定着している。そして、一方では、師であった中江藤樹から継承した精神修養の方法としての「心法」が、他方では、大名に仕える武士たちを文武両道に通じた「士」へと教育し直し、城下町への家臣集住をやめ彼らを農村に土着させる経世策が、思想史研究において論じられてきた。またその波乱に満ちた生涯についても、徳川時代から広く注目を集め、読本・歌舞伎の『朝顔日記』のモデルになったとも言われる。蕃山は、はじめ岡山藩の武士として池田光政に仕え、いったん致仕したあとで儒学に志した。二十七歳で再び登用されてからは、番頭（ばんがしら）の地位にまで昇り、徳川時代の儒学者としては例外的に、兵備や財政や窮民救済に関する政策の実行にあたったが、やがて三十九歳になった年、光政との疎隔から再度離藩する。さらにその三十年後には、大政を「横議」したとの咎で公儀から蟄居を命ぜられ、下総古河の幽閉地で七十三歳の生涯を終えている。

この蕃山の生涯について、本書は、蕃山自身の書き遺した著作・草稿・書簡に加え、岡山藩政史の関連資料や武家・公家・儒者にわたる周辺人物の日記や書簡も用いながら、綿密な検証を試みている。そして、これまでの研究では、たいていの場合、個別の問題に即して断片的にしか語られていなかった蕃山の思想に関して、その全体像を明瞭に描く。この点が、まず蕃山研究の方法という角度から見た限りでの、著者の手さばきの独自性と言えるだろう。だが本書の主要な意義は、これをさらに越えたところにある。著者は蕃山のたどった数奇な運命を、個人史として叙述するだけではすませない。蕃山の思想と生涯を、より広く、徳川時代の政治・社会の体制と、新儒学（朱子学・陽明学）の思想原理との緊張関係の中でとらえ、新しい意味づけを行なうのである。

つまり著者によれば、徳川日本の現実と儒学の理想との間には、大きな「構造にかかわる違い」（38頁）が広がっていた。戦国大名による地域国家支配の特質をひきついで成立した徳川支配体制は、その本質上、儒学の文人統治の理

念とは相容れない、軍事的な体制である。そこで支配階層となったのは、教養を通じてみずからの徳を高めた文人官僚ではない。戦闘者たる武士が統治の任につき、世襲身分制と上下の強固な命令関係が、大名と家臣との間、支配者と民との間を規律している。出身身分にかかわらず有徳者を登用するような科挙制度はもちろん施行されず、儒学がもともと君臣関係を「義合」と解し、「君、過ち有れば則ち諫む。之を反覆して聴かざれば則ち去る」(『孟子』萬章下篇)と説いたのとは反対に、家臣たる武士は主君の命令にひたすら従うものと考えられていた。明君と呼ばれた池田光政も含め、この時代に支配者の発想を支えていたのは、個人の徳性と民の声とを重視する儒学ではなく、厳しい法度を上から定めて人々を縛りあげる、兵家・法家の「絶対主義」だったと著者は指摘する。

徳川初期の支配体制と思想との関係をめぐるこうした理解は、日本思想史研究における最新の動向を、忠実にふまえたものである。朱子学の思想原理が徳川時代の身分秩序とぴったり適合し、その正当性を支えていたというかつての通説は、昨今の研究傾向ではすでに影をひそめている。代わって主流となった見解によれば、徳川初期の思想世界は儒学(朱子学・陽明学)のほかにも兵学・仏教・神道など、さまざまな思想の複合状態にあり、統治にあたる武士たちの思考を色づけていたのは、朱子学の立場からは「末学」として貶視される兵学や『太平記』の教養にほかならない。当時にあって朱子学は、支配正当化のイデオロギーどころか、むしろ体制との違和をはらんだ異端思想だったのである[(2)]。

このような、徳川時代の体制と思想をめぐる全体の状況において考えた場合、蕃山の思想はいかに位置づけられるか。それが朱子学の一種の修正版であるという事実認識については、著者も従来の理解に賛同している。蕃山が、風土と歴史を越えた普遍的な道の実現を理想としつつ、具体的な「礼法」の策定は「時・処・位」に合うよう柔軟に行なうべきだと主張し、過去の時代の人の言動の得失を現在の倫理から裁断してしまわず、その当時の基準に基づいて評価する歴史相対主義の立場を採ったことを、本書は重要な側面として取りあげる(196, 326頁)。中国と日本との「風俗」の違いから、同姓婚や異姓養子、さらには武士の同性愛まで、儒学者としてはきわめて大胆に蕃山が容認したことも、著者が以前から指摘してきた点である。

しかし本書の議論は、蕃山が朱子学を、徳川日本の現実に適応するよう変容させたことの指摘で終わってはいない。そうした意味での、いわゆる儒学の「日本化」を確認して事足れりとする立場は、現在の著者の採るところではない。逆に、現実政策や古典解釈においてはそうした柔軟性を示しながらも、孔子から孟子を経て朱熹に引き継がれた儒学の理想を、忠実に継承し実現しようとした「儒学理想主義」の実践者として、蕃山を位置づける(480頁)。著者によれば蕃山は、同時代の儒学者の中でも例外的に、儒学における「理想主義」の要素を伝統の中からひきだし、現実政治に生かすことで、徳川支配体制という「日本のリヴァイアサン」に対抗しようとしたのである(64頁)。そして、この儒学本来の「理想主義」の要素に基づきながら、新儒学の理論体系と、みずからの祖先がそうであったように農村に土着していたかつての武士のエートスと、『源氏物語』の理想世界との三者を媒介として、現実を批判し、新たな社会秩序の実現をめざした抵抗者。これが著者のみる蕃山の本質である。

蕃山の考える理想世界は、農業中心の生活の中で、人と人、人と自然が調和して生きる「大同」の状態である。儒学の伝統では(そして道家においても)、この理想社会は、中国のはるか古代に存在していたと考える。蕃山の現実政策論に見える、商業の抑制や武士の土着化という主張も、そこに根をもっていた。だがこれに加えて、蕃山はこうした黄金時代が、かつて日本でも天皇が政治の中心にいた「王代」、とりわけその善政が謳われる延喜・天暦の頃に実現していたと考える。そして、この「日本のアルカディア」「古き宮廷のアルカディア」(332, 452頁)の姿をもっとも鮮やかに教えてくれる

古典文献が『源氏物語』であるとした。池田光政のもとを去ったのち、蕃山は京都に移住し、公家や文人たちのサロンに加わって、和歌や物語や雅楽の素養を身につけた。そしてみずから『源氏物語』の注釈に着手する。この作業から生まれた著作『源氏外伝』は、著者の評価では、蕃山の仕事の中でも最高度に、想像力が豊かに働き独創性に富んだものである（177頁）。

本書は随所で、蕃山が『源氏物語』に発見した理想世界を「アルカディア」と呼ぶが、このことは著者のとらえたその特質と、よく見あっている。ユートピアが人間の側からの秩序と計画を通じた自然の支配を象徴するのに対し、ウェルギリウスの『ブーコリカ（牧歌）』以来、ヨーロッパの文人が理想郷として謳ったアルカディアは、田園生活における人間と自然との調和を特徴とする[3]。そこでは、自然の豊かな恵みをうけて人々が幸福な生をおくり、たがいに暖かな感情を通い合わせて、歌競べをし、恋愛に耽るのである。蕃山は、感情の過剰な発露を抑えることで人間本来の道徳性を実現しようとする朱子学の発想に立ちながらも、「人情」の豊かな潤いを減殺してしまう厳格主義を斥けた。そしてみずからも和歌に親しみ、笙の演奏に通じた文人であった。したがって、人々が「好色」に過度に溺れる傾向はあったにしても、豊かな感情と自律性に富んだ良心との釣りあいを見せ、たがいに歌のやりとりをし、自然の風物に繊細な心をふるわせる『源氏物語』の世界は、蕃山の理想に、格好の具体像を与えたのである。それはまた、古代中国の理想の世から伝えられた礼楽、とりわけ楽（音楽）が、宮廷生活を通じて生き続け、調和と美しさとをかねそなえた秩序を醸し出す世界でもあった。

『源氏物語』との出会いを通じて、蕃山は、日本にもこのアルカディアがかつて存在したと確信し、その復活をめざすようになる。著者の見るところ、『源氏物語』への礼賛もまた、そのまま現実に対する抵抗の意味をもっていた（406頁）。ただ蕃山は、武家支配を排して天皇親政を復活させようとまでは考えない。天皇（「帝王」）の地位に関するその主張は、後水尾天皇を二條城に迎えた際、演じられた舞楽に感動した徳川秀忠の例を引いて、秩序形成の要となる古代中国の礼楽を、武家（「将軍」と「大名」）の人々にも後世まで伝えるものとして、天皇家と公家とを尊重せよと説くまでにとどまる（355, 437頁）。しかし、『源氏物語』研究を経たのちに、蕃山が現実政策論を盛りこんだ『大学或問』は、当時の江戸の公儀に対する痛烈な批判の書であったと著者は解する。そこに展開された、「仁政」を行なうには、世襲の家柄に拘泥せずに「賢才」を挙げ用い、「言路」を開いて「天下の人心」に応じた政策を施すべきだという主張は、実は時の公方、徳川綱吉への批判であり（422頁）、これが蟄居処分の引き金となった。著者によれば、徳川家による支配について蕃山がどの著作でも文言上ほとんど言及しなかったのは、「意味ぶかい沈黙」である（467頁）。蕃山は終生一貫して、体制にとっての「厄介者」(irritant)であった（128, 444頁）。

研究史の上から言えば、蕃山の思想における理想主義の要素、そしてそうした思想が徳川儒学の中で登場していたことの指摘は、80年代に盛行した、ハリー・D・ハルトゥーニアン、テツオ・ナジタ、ヘルマン・オームスら、日本研究におけるシカゴ学派の潮流に対する批判の意味をもっている[4]。著者は一面では、徳川の公方による全国支配は、一定の思想原理と結びついたものではなく、その支配を根本で支えるのは赤裸々な実力であり、その儒学への関心も、統治の便宜のため、みずからの権威づけの道具としてさまざまな思想を利用するうちの一つにすぎなかった、という彼らの体制理解を支持する（62頁）。また、民を憐れむ「情」を忘れ、統治の効率だけを指標とした合理性を「理づめ」に追求する支配者にむけた、蕃山の批判を紹介する口ぶりには、シカゴ学派と共通する、50年代型の「近代化」論への批判意識がうかがえる（197頁）。だが他面、ナジタらの徳川思想研究が、支配者の専制志向と被支配者のコンフォーミズムとに染めあげられた抑圧の世界として時代を描く結果、あまりにも単純で貧困

な歴史像しか提示できなかったことを、著者は厳しく批判する。そこで、この暗黒の時代に対する抵抗主体として高く評価されるのは、大鹽平八郎・安藤昌益といった、暴発的な反抗者やおよそ支配関係一般を否定するユートピアンであり、新儒学の思想と公方・大名による政治との両者の枠組の内側から改革を試みた蕃山に見られるような「それほどラディカルではない抵抗」の可能性は、視野からまったく抜け落ちてしまう。それは徳川時代の思想世界の全体像としても、儒学の伝統そのものの理解としても、きわめて歪んだものであると著者は断じる(10, 464頁)。

しかし本書は、そうした研究動向における事情や、時代理解の適切性の要請のみに基づいて、理想主義者としての蕃山を語っているのではない。その叙述には、蕃山の思想と、そこに結晶した儒学の理想主義の伝統とに対する、著者自身の高い評価と共感が息づいている。著者によれば、道家の神秘志向を排した人間中心主義と、法家の専制主義に対抗して民意に基づいた政治を志向する民本主義と、身分にかかわらずすべての個人に道徳－政治上の徳性が潜在すると説く平等主義の、三つの傾向を、儒学はもともと備えていた。この理想主義の立場を体現したのが孟子であり、それが新儒学に至り理論体系にまで高められたのである。著者は尾藤正英やウィリアム・Th・ドバリーによる新儒学評価を継承して、朱子学と陽明学は、宇宙の万物にはそのすべてを共通に貫く「理」が内在するという「万物一体」の立場を取るかたわら、その理の発見と実現にむけた修養にあたっては、個人の自律を大幅に尊重する個人主義を説いていたと説明する（37頁)。

そして、新儒学のこの理想主義の傾向を、徳川初期の儒学者のなかでもっとも純粋に凝縮して示すのが、蕃山の思想ということになる。蕃山は、政策論において民意に基づいた統治と仁政の実行とを主張し、修養論の中では自己の内からの確信を尊重する「自得」を強調した(173頁)。そして、万物に賦与された理の共通性を認めながら、その理を完全に体現した古代中国の聖人たちのあいだですら「其気象同じかるべからず」として、個人それぞれのかけがえのない独自性を説いたのである（188頁)。もちろん著者の周到な記述は、父子・男女・君臣の上下関係を前提とする儒学倫理の限界や、蕃山の人格の不遜で傲慢な側面についても説き及んでいる。だが全体の論調においては、儒学と蕃山の思想に見える理想主義を高らかに賞揚する傾向が著しい。本書はアイザイア・バーリンの所説に言及しながら、普遍的理法の実在に関する確信と、個人の自律性・多様性とを、その間に横たわる緊張関係を認めながらともに認容する立場は、現代のヒューマニズム思想に通じると評価する（269頁)。丸山眞男の徳川思想研究について、その批判を通じた継承の姿勢を掲げているのも、同じ関心の延長線上にあろう(7頁)。『源氏物語』の主人公、光源氏を蕃山が「道徳上の英雄」(moral hero)と見なしたという表現が本書には見えるが(393頁)、著者にとっての蕃山もまた、確かにモラル・ヒーローなのである。

著者のこうした解釈が一定の説得力をもつことは否定できない。また、前近代の抑圧に満ちた教説と見なされがちな儒学の思想に関して、現代の世界にも通じるような普遍的な意義を認め、そうした伝統が徳川日本にも生きていたとする見解も、伝統の再評価の試みとして豊かな魅力をたたえている。蕃山を、単に「日本的」儒学の主唱者として、あるいは巧みな経世家としてのみ評価してすませることは、本書の登場によって、もはや不可能になったと言えるだろう。

しかし反面、疑問点もないわけではない。たとえば著者は、人々のあいだに調和をもたらし秩序を安定させる手段として、蕃山が礼楽、特に楽を重視したことを指摘する（203頁)。だがこの楽が人の心に及ぼす作用について、朱熹は、そのはたらきは「思勉」により統御できるものではないと語り、ゆっくりと長い時間をかけて、何度もその旋律に耳を浸し、楽舞を目にすることを通じて、人は身体感覚の内からしだいに他者との秩序だった調和に向かうのだと説

いている[5]。このように、感覚の深みから人々の内面を変えてゆく礼楽の作用は、著者が蕃山の思想に見いだした、個人の意識的な自律の要請とは、衝突するはずである。理想主義の伝統においては、礼の自発的な履行が求められていたと著者は語るが（145頁）、そこで個人の意志が礼の実践形態を左右できる範囲は、きわめて限られるのではないか。

もちろん、著者が「儒学理想主義」の枠組によって、新鮮な魅力に満ちた蕃山の姿を描きえたのは確かだとしても、そのことが他面では、徳川思想史における蕃山の位置に、過大な特権を与えてしまったように思われる。本書において、蕃山を除いた徳川時代の儒学者はほとんどみな、兵家・法家の伝統に属するか（山鹿素行・荻生徂徠）、理想主義の本質を失ない権威主義に堕した朱子学（山崎闇斎とその学派）であるとして、低い評価しか与えられていない。その結果、どのような徳川思想史の全体像を描こうとするかについては、以前の著者の論文に比べても、曖昧になってしまった。

このことはおそらく、徹底して儒学の思想原理と現実社会との対抗関係という角度から、蕃山の思想を語ろうとする本書の方法に起因する。たとえば蕃山の神道理解は、古代中国の聖人である文王の伯父、呉の泰伯が日本に渡ってアマテラスとなったとし、三種の神器が象徴するのは世界普遍の儒学の道だと説く、独特のものである。著者は、この論法は儒学の理の普遍性と、日本の信仰習俗の特殊性とを媒介しようとする理論装置であると解する（210頁）。むろんその評価は適切であろう。だがこれに加えて、みずからの神道論を伝える蕃山の語りは、単に理論の上の言明だけでなく、自身の体感する世界感覚を、実に生き生きと示している。――「野拙は、たゞ其聖神［＝アマテラス］の徳をあふぎ奉るばかりなり。……参りても又おもひ出しても、聖師にむかひたるごとく、神化のたすけすくなからず。……たゞ聖王［＝聖神］のみならず、霊山川のほとりに行ても道機に触の益すくなからず。これ又山川の神霊の徳に化する故なり」[6]。ここに表現されているのは、目に見えない神霊の働きに遍く満たされた世界の姿であり、万物に生気を与えるその冥々の作用を、全身をもってうけとめる現実感覚である。この、いくぶん中世的とも言える世界観が、儒学の教養を身につける以前から、蕃山の現実像には浸みとおっており、その新儒学受容は、一面、理の体系を借りてこのコスモロジーを理論化する試みだったのではないだろうか。本書が随所で指摘する、エコロジーに関する蕃山の関心の強さも、朱子学の天人相関理論や道家の理想ではなく、そうした当時の日本人が自然界にかかわる際に感じていた実感に発すると見た方が、より説得性をもって説明できるだろう。

つまり、それぞれの思想家の営みを支えている世界観、コスモロジーに着目して評価した場合、徳川初期において、蕃山は決して例外的な人物ではない。こうした世界像を理論化しようとする同じ傾向は、中江藤樹はもちろん、著者がさまざまな点で蕃山の対極に位置づける山崎闇斎の思想にも認められるだろう。教学の方法に関して蕃山の排した教条主義の傾向が、闇斎の思想に色濃いことは、著者の指摘の通りである。だが他面、闇斎もまた朱子学の普遍的な理の観点から徳川社会の「武俗」を徹底して批判したのであり、のちに「垂加神道」と呼ばれたその『日本書紀』神代巻解釈の試みも、蕃山の『源氏物語』注釈と類似した意味をもつように思える[7]。徳川初期の思想家たちのさまざまな模索は、彼らが実感していた、自然界に偏在し万物を生かしめる目に見えない働きを、何とか人間の思考力で把握できる形で説明しようとする課題を、共通に抱えていた。それをいかに理論化するかについての違いが、たとえば闇斎と蕃山の差となって現れたのではないか。政治・社会体制と思想との関係という次元にとどまらず、思想の奥底に横たわるコスモロジーを見すえるところから徳川初期の諸思想を位置づけ直し、そうした世界像が十八世紀の徂徠学の登場以降の思想史においていかに変容してゆくかをたどることで、本書の実り多い分析を、さらに徳川思想史の全体像の新たな構築へと生かすことができるだろう。

(1)その中で日本語で発表されたものとしては、以下の三篇がある。「熊沢蕃山――その思想における『情』の概念」(相良亨ほか編『江戸の思想家たち』上巻所収、研究社出版、1979年)、「熊沢蕃山『源氏外伝』の起草と伝本について」(『日本歴史』381号、1980年2月)、「公家・武家・儒者」(横山俊夫編『貝原益軒――天地和楽の文明学』所収、平凡社、1995年)。

(2) 前田勉『近世日本の兵学と儒学』(ぺりかん社、1996年)、若尾政希『「太平記読み」の時代――近世政治思想史の構想』(平凡社、1999年)。前者への言及は、本書64頁の注に見られる。

(3) 川端香男里『ユートピアの幻想』(講談社学術文庫、1993年) 41頁。

(4) シカゴ学派の日本研究については、J.Victor Koschmann『水戸イデオロギー』(田尻祐一郎・梅森直之訳、ぺりかん社、1998年) の訳者解説が、好個の説明を展開している。なお、蕃山の思想を「伝統理想主義」と規定する先行研究として、尾藤正英『日本封建思想史研究』(青木書店、1961年、244-245頁) がある。マックマレンは、その理解をいったん継承した上で、蕃山は尾藤の説くように「身分制の秩序をいわば合理化する」改良の立場にとどまったのではなく、さらに現行の秩序を超えた、別種の社会秩序の構想にむかったと評価し直している (465頁)。

(5) 朱熹『論語或問』、泰伯篇第八章に関する問答。

(6)『集義和書』巻第二 (『日本思想大系30・熊澤蕃山』、岩波書店、1971年、42-43頁)。

(7) 朴鴻圭「山崎闇斎の政治理念」(東京大学博士論文、1999年) から教示を得た。

維新革命の可能性と現実――書評：伊藤彌彦著『維新と人心』

（東京大学出版会、1999年12月刊、本文281頁、索引8頁）

平　石　直　昭（東京大学）

1．明治維新はどんな意味で「革命」だったのであろうか。それはどんな歴史的な可能性を秘めていたのか。にもかかわらずなぜ現実には、後世が目撃するような無残な結果に終ってしまったのか。これらの問題は、近代日本の歴史的性格を理解するためにも、また敗戦日本の課題や現にわれわれの課題は何であるかを考える上でも、避けて通れない問題である。維新が未完の革命あるいは失敗した革命であったかぎり、そのやり直しを求める声は、日本が危機に直面した際にはほとんど常に現われた。今後も現われるであろう。しかしこのやり直しを成功させるには、維新の原理を明らかにするだけでは十分でない。それが人心を捉えることに失敗した理由をも、同時に解明する必要がある。原理が人心を捉えなければ、それは一片の空文に終るからである。「人心」という客観的な契機がここで問題になる。それは逆に「維新」を失敗に終らせた相手方＝勝利者の側の原理が何であり、彼らは如何にして人心を捉えたのかの考察へと導くだろう。そしてさらにこの課題は、勝利者の構想に基く近代日本の体制が、なぜ長期的には日本の自滅を齎したのか、その解明の仕事へもわれわれを導くはずである。

伊藤彌彦氏の新著『維新と人心』は、こうした基本的な問題にたいして正面からぶつかり、一つの歴史的な変化の見取図を描くことによって、系統的な解答を示そうとした力作である。本書は6章からなり、前の5つの章と最後の第六章では、カヴァーしている時代の広がりや手法が異なる。しかし両方が内容的にはうまく組み合わされることによって、上記したような問題にたいする一つのトータルな解答提示に成功しているといえよう。

前の5章分で著者は、主に幕末から明治20年代半ば頃までを対象とする。そして図式的にいえば、一方に「人心」とその変動、他方にそれに働きかける指導的な政治家、思想家等をおき、両者の関係の種々相を時期を追って分析してゆく。たとえば指導者による人心への教導や操作、その方法と内容、使われたシンボル、逆に人心の独り歩き、また働きかける側における路線の対立や闘争などである。ここで「人心」の内容やその主要な担い手層は、時期に応じて多様である。その変容の跡づけが本書における著者の一つの追究点ともいえる。そしてこの分析を通じて著者は、幕藩体制下の日本が政治革命を経て一応の再生をかちとり、様々の試行錯誤を重ねつつ新しい体制を構築してゆく激動期に、人心がどう動き、指導者たちはどう働きかけ、そうした無数の錯綜の中で、最終的に天皇制的な国家秩序がいかに勝利したかを明らかにしようとするのである。

端的にいえばこの部分で著者は、近代的なネーション形成と議院内閣制を軸とする憲法体制、そして多元的な価値の共存する自由な市民社会の建設へと向かう可能性を秘めていた「維新」が、実際には天皇制国家秩序の下で「国体」が唯一正統的な位置を占めるような窮屈な閉塞社会になってしまったのは何故か、この問題にたいして一つの思想史的な説明を試みたといえよう。そうした歴史の暗転、ないし維新革命の可能性と現実的帰結のあいだの大きな落差を、「人心」とその教導という分析視角から解明するというのが、ここでの著者の主旨である。このモチーフは福沢諭吉と井上毅を対比的に扱った第四章にもっともよく示されている（後述参照）。

他方、第六章で著者は、射程を明治以後にま

で延ばし、近代日本における国家と教育の問題を歴史的というよりはむしろ理論的な視角から扱っている。とりわけここでの著者の関心事は、井上毅もその制作に主要な一翼を担った天皇制国家秩序が、その円滑な再生産のために徳育中心の教育主義を基礎においたこと、しかし福沢らの開明的教育路線を文部省内部から追放しつつ採られたこの教育方針が、実は近代日本の精神をむしばみ、皮肉にも道徳的自発性を喪失した臣民を生んだという病理現象を指摘することにある。徳育主義の下で「エゴイズムの制度化」がなされなかったために、二重人格の倫理が蔓延したということである。こうして本章で著者は、前の5章でその勝利の過程を追いかけた徳育主義者らの路線が、たしかに短期的には勝利したものの、長期的にはかえってそれ自体に内在する論理の必然性によって、近代日本の精神的自壊を齎した事実を明らかにする。

たとえば著者は「修身」教育と「就業」教育を二本柱とし、国家への忠誠心と生産力の調達を目指した徳育主義が、資本の要請→就業教育の強化→ルールなき抜け駆け競争＝道義の頽廃→修身教育の強化→青年の無気力化→青年の覇気を求める資本の要請、という悪循環に陥った過程を理論的に明らかにしている（p.263）。これは平時における悪循環であり、昭和の全体主義時代には同じ教育路線が、一方での対外膨張と他方での民衆の生命の大量消耗を招いたという。そしてつぎのような一文によって本書は閉じられている。「その結果、学校教育を通じて人心を管理するシステムは大きく破綻した。これが明治維新という日本歴史上空前の変動期の人心を安定させ、かつ操作すべく官僚たちが創作した「人工的習俗」の歴史的帰結であった」（p.266）と。

こうして全体として本書は、当初競合していた二つの路線のうちの一方が勝利し、しかしそれがかえって長期的には日本の崩壊を齎した経緯を、とくに近代日本の国家教育が、人々の精神形成に果たした役割とその帰結に重点をおいて明らかにしたといえる。手法の違う二つの部分が組み合って読者に一つのメッセージを伝えるのに成功していると述べた所以である。以下では本書の内容を順序を追ってもう少し詳しく見てゆこう。そこには多くの有益な洞察や分析が含まれており、上記したような問題を考える上で、読者は豊かな示唆や知見を与えられる。

2. 上述のように本書は全体で6章からなるが、第五章は「教育勅語」の創作に従事した井上毅の宗教観や政治と宗教の関係観を扱い、第四章と関係が深い。第六章については上記の通りである。そこで以下では前の4章分を主として扱うことにしたい（第六章については読者自身の味読を期待する）。これらの章で著者は、「人心」の動向や、それに働きかける指導層の変化等に即して上記の時代を四つの時期にわけ、それぞれを第一章から第四章に配当して分析している。①幕末期、②維新期、③廃藩置県以後しばらく続く文明開化期、そして④明治14年の政変前後からの約10年程の時期である。そこには一貫した時代変化の見取図がある。

まず第一章では、鎖国体制下の徳川日本で「習慣の専制」の下に眠っていた人心が幕末期に目覚めて、急速に状況化し、徳川体制を打倒する方向で結集する過程が描かれる。このような幕末における「人心の支配」（昂揚した人心が結集して政治変動を可能にした事情を著者はこう呼んでいる）をもたらした要因として著者は三つをあげる。現体制に不満を抱く下級武士層を中心としたアクティブな社会集団の存在、幕府の度重なる失政と権威の失墜、そして人心の結集軸となった尊王攘夷イデオロギーの存在である。これらが相乗効果を伴いながら処士横議の風潮を展開させ、政治エネルギーとして高まり、幕府倒壊に導いたという。特徴的なのは著者が、この時期の「人心」の動きとして、志士の指導による政治的な尊攘運動とともに、民衆の自然発生的な一揆や「ええじゃないか」を挙げながらも（p.14）、後者にたいする評価は低いことである。それは「衰弱した抵抗の域を出なかった」とされる（p.41）。農民上層部の尊攘運動への参加は一応ふれられるが（p.13）、

それが著者自身の幕末維新期の「人心」観の中で、他の要素とどのような連関をもっているのかについて十分な展開はなされていない。この点は、後に第三章で著者が文明開化の受容層を扱うさいに問題となる。

第二章では、大政奉還から廃藩置県までの時期を取りあげる。ここでの著者の主たる問題関心は、幕府の打倒から地方諸侯の封建的権力基盤の奪取、さらに権力の集権化へといたる巨大な変革だった維新の政治変動が、なぜ比較的スムーズに遂行されえたのかということである。著者はそこに「王政維新派」とよぶ一群の政治家たちによる卓越した人心操縦を発見し、その成功の諸側面を見てゆく。

具体的には、大久保利通や岩倉具視らが「公議輿論」「人材登用」「天皇」などのシンボルを巧みに操りながら、土佐派を中心とした公議輿論派や旧藩主層などの対抗政治勢力に対して主導権をとって新政府の権威を確立していった経緯、また不満を抱くかつての尊攘志士層や野心をもつ有能な下級士族など、問題となる政治勢力を操作し、状況をコントロールしていった様子が描き出される。こうして「王政維新派」のリーダーシップが高く評価されるのである。この点は本書の中でも興味深い指摘の一つである。明治維新自体について著者は「乱世的革命」という竹越の見方に賛成している。フランス革命などと異なり、予めそれを指導する一定の政治理念や国家構想の青写真があったわけではなく、走りながら考えた傾向が強いからである。しかし同時に著者は「王政維新派」による状況操作を最大限に評価して、そこに成り行き任せや状況追随ではない「政治の回復」を見いだしている。

第三章では、廃藩置県から約10年間ほどにおける「人心」の変化が扱われる。廃藩置県後の政府の開化政策と洋学者による啓蒙活動によって、新時代の到来が全国民的規模で意識された。そしてその人心は伝統的生活様式の破壊に向かって結集された。維新政府の支配層内部の政治権力闘争にすぎなかった維新は、ここで始めて広汎な人民を巻き込んだ社会文化革命の様相を帯びるに至った。以上が著者の見方であり、ここに注目してこの時期は「人心の騒乱」時代とよばれるわけである。

本章で著者は、旧物を破壊する開化政策が維新政権の基盤強化に役だったことを指摘しつつ、それは日本が「開国」と「建国」の二つをほぼ同時に行った国だったからだという(p.96)。他にも多くの指摘がなされているが、評者にとってとくに興味深かったのは、典型的な文明開化現象として学習熱・学校熱を取り上げた部分である。

ここで著者は、中村正直と福沢諭吉の初期の著書が「近代的人間像」「あるべき精神構造の座標軸」を示したとともに、当時の青年に「学習を通じて立身出世を志すという人生の新しい方向づけを指南した」と評価する(p.80−1)。しかしこの背後には新設の文部省を中心とした教育政策があった。その「学制」の路線を著者は「富私強国」型とよび、小学校の出現が庶民に与えたインパクトの大きさと、その設立が全国に強制されたことで文明開化の光が地方にまで及んだことを強調している。しかし他方で著者によれば、「学制」では中等教育政策が不備だったため、小学校卒業生の進学先を用意すべく全国に私学の結社が出現した。そしてそれらがしばしば公議輿論運動と結びついて、政治青年を生みだし、そのエネルギーが地方民会を支え、さらには国会開設を求める民権運動の裾野を広げたというのである(p.88)。この部分は、ある観念が一定の制度や社会条件の下でどのように人々を捉え、それがさらに他の観念と結合しつつどのような運動を生んでいったかに関する知識社会学的な分析であり、本書の中でも面白い連関の指摘の一つだと思う。

本章の最後で著者は、この文明開化の時代の後半に人心がどのように推移していったかを次の時期との関連で見通している。それによれば初期の開化熱には徳川社会の定型性を解体し、開いた社会への推移を歓迎する人心があった。しかし明治10年代に入ると、この人心は、一方で自由民権運動にみられる激情型の昂揚に向

かうとともに、他方では開化が破壊の連続だったために、民衆の間に疲労を伴った混迷を生みだした（p.106）。価値基準の解体によるニヒリズムやアノミーの蔓延であり、ここに一方では破壊事業が再考されて、新しい信条体系の模索が始まる。他方では改めて社会習俗の定型化を希望し、権威ある基準への帰依を求める感情が次第に強まったという。そして著者によればこの感情を捉えて自己の権力基盤を強化していったのは明治政府の側であり、元田永孚や西村茂樹の徳育中心の教育論は、いまや守旧派によって占められるに至った文部省において着実に制度化されていった。一方青年層には出世のための「叩頭学」が流行りだし、こうして徳育教育によってエゴを否認しつつ、実際には出世欲に煽られる「肥私奉国」型の青年が現われた。二重人格倫理の時代の始まりである（p.112）。

第四章では、明治14年の政変前後からの約10年間を対象としつつ、この時期の人心「教導」がいかになされ、それがどんな結果を生んでいったかを分析する。本章は本書全体の約1／3の分量を占め、著者の鮮烈な問題意識と提起されている問題の重要性、さらに対立する福沢諭吉・井上毅両者への内在的な理解を踏まえた批判等の点で、本書中の白眉である。

周知のようにこの政変では、英国風の議院内閣制かプロシア風の立憲君主制か、そのどちらを取るのかという近代日本国家のあり方を決定する大きな選択がなされた。その政治史的な過程については大久保利謙など優れた先行研究がある。これにたいして著者はむしろ、この政変を契機としてその後に人心が大きく変化していった事実に注目する。すなわち明治14年前後の日本では、自由民権運動が燎原の火のように燃えさかり、人民の政治的エネルギーはかつてなく高まった。明治政府は「人心」の離反に直面して危機にあった。一方10年後の明治政府は、国会を開設し、憲法・教育勅語を発布して基本的な国家体制とそれを支える精神的な基軸の設定に成功していた。「人心」は天皇制国家秩序の枠内に取り込まれつつあったのである。

筆者はこの大きな変化の背後に、世論形成における福沢から井上への主導権の推移を見てとり、その見地からこの時期を跡づける。まずこの政変前後において「人心」にたいして井上毅が下した処理法に注意をむけ、そこで打ち出された人心教導のための諸政策が、隠微にしかし着実に日本社会の内部に浸透していった過程を追究する（第二、三節）。ついでほぼ同じ時期の福沢がどのような世論形成を図っていたかを検討し（当初の国会開設を煽る路線から政変後の官民調和論への転換。第四節）、最後に「一つの精算」（第五節）では、明治20年代半ばの福沢の評論に見られる一種の「挫折」の告白（政府の「超然主義」への幻滅と、とくに政変後に明治政府がとった保守的な徳育中心の教育路線への転換とその下での自由の喪失への批判）を紹介して、つぎのようにこの10年間に起った変化を歴史的に意味づけている。「これは、福沢諭吉の宿志であった「自由独立の気風」の衰退、明治の世界に実現しようと奮闘した市民社会の流産にほかならず、代って登場したのは古学者に守られた天皇制臣民社会であった」（p.191）と。このように著者は、この政変を転回点として「人心一変」がもたらされたとし、それがさらに「教育勅語」制定後の「官製習俗の圧政」時代に連なると見る。

著者によれば井上の政治理念は、有徳者君主の下での伝統的な共同体秩序指向にあり、安民仁政を理想としていた。この見地から井上は、プロシア憲法を日本化して「大日本帝国憲法」を日本固有の政治原理の発達として捉えた。しかし他方で井上は人心に支持されない憲法は一片の紙切れにすぎないことも熟知していた。しかも一般人民にとって皇室はなじみの薄いものだった。かくて憲法に基く天皇制国家秩序を確実なものにするためには、皇室を人心内部に浸透させなければならず、ここに皇室尊崇の慣習を新たに作りだすために「教育勅語」が制作されたというのである。この問題がはらむ連関は、第五、六章でたちいって論じられているが、その一端は上述した通りである。

3．以上本書の内容を簡略に紹介してきた。以下では人心の担い手や井上の政治思想を中心にいくつか疑問を出してこの書評を終りたい。

1）第一章で著者は、福沢諭吉、竹越與三郎らによる同時代史的な評論や史論を頻繁に引照し、主な下敷きとして利用している。その意味では二次資料に依拠した性格が強く、一次資料に基く著者自身の幕末人心論が示されているようではない。たとえば後期水戸学がキリスト教に対する対抗イデオロギーとして「国体」概念を思想化していった理由、平田派国学が農村上層部に浸透して彼らの心を掴んでいった経緯、豪農層を基盤とする横井小楠指導下の熊本実学党の活動（これは別の文脈で出てくる。p.88）、あるいは渋沢栄一の自伝から窺える農民層の政治的覚醒の様子、これらを使えばもっと具体的に幕末期の「人心」論を描けたのではなかろうか。

この点に関する評者の疑問は、開化ブームを支える民衆に関する著者の説明に関わってくる。そこで著者は、開化政策に「加勢する多数の民衆があった」。民衆も「上の指示にロボットのように従う無思想の客体だったわけではない」という（p.78）。しかしこうした民衆は歴史的にいかに形成され、彼らはこの開化期に先立つ幕末期維新期の人心形成にどんな役割をはたしていたのであろうか。この点について、本書は系統的な論及をしていないように思われる。下層民衆とは区別された豪農・豪商層の政治的覚醒、彼らが放出していった社会的エネルギーへの注目が不十分ではないかということである。

関連して著者は、維新期の変動が主に支配層内部に止まり、社会の底辺まで達していなかったという理由で、それは「兵馬の騒乱」時代ではあっても「人心の騒乱」時代ではなかったと強調するが、ここで著者が福沢の文章に引照してこれらの言葉を使っているのには疑問が残る（『文明論之概略』緒言中の一節）。その使い方は必ずしも福沢の原意に沿っていないと思われるからである。福沢は異質な西洋文明と日本文明の接触がペリー来航を契機として巨大な「人心の騒乱」を惹き起こしたとし、「兵馬の騒乱」はそれが表面に現われた一現象と見ている。だから今後も「人心の騒乱」は益々激しくなるだろうというのである。それは西欧の衝撃を受けて以後の日本を根本で規定する、極めて長期にわたる過程であった。しかし著者は「兵馬の騒乱」が終って「人心の騒乱」時代がきたと見る。そこで福沢を引用しながらも「正確にいえば「人心の騒乱」は廃藩置県以降、本格的に始まったのである」として、福沢の見方を修正するのである（p.78）。著者のような時期区分の仕方はありうると思うが、引照された福沢の考えとはズレていることを指摘しておきたい。

2）著者は、井上毅の民衆観はもっぱら有徳な統治者の恩恵をうけるだけの温順な客体にすぎないという（p.165）。もしそうだとすればそれは儒教的な人民観となり、民は政治的に無責任ということになる。この見方は「教育勅語」が日本の伝統的な共同体秩序維持のための日常徳目の国家化だという見方にも連なっていると思われる。しかしいうまでもなく「勅語」には「一旦緩急あれば義勇公に奉じ」という一節がある。国家の対外的な危機に際しては積極的に命を捨てて、一兵卒として国家のために戦えというのである。この民衆への呼びかけと期待は、恩恵をうけるだけの温順な客体としての民衆像とは違ったものであろう。そこには儒教の人民像とは異なるナショナリズムの論理がある。著者は井上の、あるいは「勅語」のこの面をどう考えるのだろうか。

3）著者は明治14年の「進大臣」の井上が、一般民衆を政策対象としては考えていなかったと指摘している（p.157）。他方p.192では、天皇制国家秩序を安定させるためには、民衆になじみのうすい皇室という資源を慣習化する必要があり、このために皇室を尊重する官製慣習を制作する必要があったという。それが「教育勅語」だったというのである。問題は井上が（民権運動に参加するようなアクティヴではない）非政治的な民衆の意識の内面までを統制する必要を、どのような過程を辿っていつ認めるに至ったかである。少なくも「進大臣」の段階での彼

は「教育勅語」的なものを考えてはいなかった。むしろ英仏派とのイデオロギー上の自由競争を通じて、相手の機先を制して「文壇に勝を制する」ことを追求していたのである。それがなぜ天皇という権威まで持ち出し、民衆の内面まで国家が支配する路線に踏み込んだのであろうか。この変化の説明は、本書では十分になされていないように思われる。著者は、別の箇所では、14年政変前後の井上にとってすでに「「人心」を操作するための人工的習俗としての教育勅語を策定することは重要な急務であったといえる」といっている（p.215の補注）。しかしこの見方は、上述の著者自身の指摘と矛盾してしまうのではなかろうか。

関連して著者は、第六章で元田や西村が道徳教育を強調した動機として、彼らがエゴイズム剥きだしの民衆に危機感をもったことをあげており（p.247）、それは第三章での、破壊の連続だった開化政策の下で民衆が内面信条を喪失したアノミー状況に陥ったという見方と連動していると思われる（p.109）。すると著者自身の論述からしても、明治10年代半ばの時点で、元田や西村らの元来道徳教育を重視していた文部省周辺の保守派と、ある意味でもっとモダンな伊藤博文の近くにいた井上毅とでは、政策の対象として、第一義的に民衆を考えるのか、政治的に活性化した分子を考えるかで、違いがあったことになる。しかしこの点の相違が本書ではクリアに浮かび出ていないように思われる。それは本書での「教育勅語」への井上の関わり方の説明が、やや「本質顕現」主義的であることと関係しているのではなかろうか。

4）著者によれば、井上には「「宗教の自由」にたいする理解は完全に欠落していた」とされる（p.217）。この見方はどこまで正しいのだろうか。この点は大きくいえば、井上と伊藤博文の憲法解釈の違い如何という問題に関わる。評者の念頭にあるのは旧憲法第28条の「信教の自由」の規定に関する『憲法義解』の解説である（岩波文庫版、59頁）。そこには「本心の自由は人の内部に存する者にして、固より国法の干渉する区域の外に在り。而して国教を以て偏信を強ふるは尤人知自然の発達と学術競進の運歩を障害する者にして、何れの国も政治上の威権を用ゐて以て教門無形の信依を制圧せむとするの権利と機能を有せざるべし」と書かれている。そして宮沢俊義の解題によれば『憲法義解』は「主として井上毅の筆になると一般に伝えられてゐる」（同上181頁）。評者はこの説が今日もそのまま通用しているのかどうか知らないが、もしこの説の通りだとすれば、井上が「宗教の自由」にたいする理解を全くもっていなかったという著者の主張は成り立たないであろう。同じ疑問は、井上が伊藤以上に非立憲的だったという著者の評価にたいしても持たれる。著者の見解を聞きたいと思う。

あらためていえば、本書は、近代日本の国家秩序形成とその下での国家教育による人心形成が何をもたらしたかというきわめて重要な問題に正面から取り組んだ力作である。本書で著者が、近年の日本の教育や政治の動向にふれているわけではない。しかし教育を政治の手段と化し、人々に幼児期から一定のイデオロギーを注入するやり方が辿った行末に関する本書の分析は、昨年来とくに「国旗・国歌」の法定化が教育現場で果たしている隠微な抑圧機能を考えるとき、すぐれて今日的な含意をもっている。その点だけでも本書は、広く味読されるに価するといえよう。少なくも評者は、そのように本書を読み、そのように著者のメッセージを受けとめた。（2000.4.18）

川出良枝「自由な討議と権力の不在」（本誌９号）に付して

木　庭　　顕（東京大学）

拙著（『政治の成立』、東京大学出版会、1997）に対する川出氏の批評を読み、私信にて応答したところ、それを公表したらどうかという川出氏の勧めに接し、これを受諾することとした。こうしたいきさつから、私的な部分を削除し若干の表現を改めた以外はむしろ原形を維持することとした。

JCSPT Newsletterを初めてうけとり、拙著に対する卓抜な書評を読ませて頂きました。私のアプローチの特徴が見事に捉えられていて、しかも自発性の強い才気煥発の文章、脱帽せざるをえません。早稲田での研究会でうかがっていた内容ではあれ、文章の魅力を得てまた別の印象をもたらします。独自の政治学的考察としても興味深く、拙著がそのきっかけになりえたとすれば光栄です。もっともその前に、このような実験的な段階の所産を丹念に読んでいただいたこと自体、深く感謝しなければなりません。

他方で勿論、鋭い批判に決して欠けはせず、これらについては、早稲田で答えた以上にやはりお答えする必要を感じます。

第一に、「多元主義」に対する曖昧な態度は、全く御批判の通り。政治の概念のレベルでは決してゆるやかなコンセンサスと大きく離れるものではない、むしろ関心は政治の前提に存する、ということを言おうとした註です。実際、「多元主義」の根底に＜分節＞に近いニュアンスが無いわけでなく、またDahlにおけるように、或る種の「多元主義」は比較政治研究や社会構造分析に視野を開かせた大きな功績があります。しかし、他面では「多元主義」自体に曖昧な部分、政治を簒奪する部分、があることも疑いなく、もっと分析的に扱うべきでした。「多元主義」に内在する大きな混乱（政治とデモクラシーの混線）を解剖することはこの次のデモクラシー論の大きな課題の一つです。

第二に、主権の問題。今回読ませて頂いて、「主権」概念自体を問題とされているのではない、従って早稲田におけるようにボダンとローマの関係を持ち出しても答えにならない、ということを理解しました。決定の実施が取引・迂回・サボタージュ等々にあわずにストレートに進むことがどこで保障されるのか、という批判であるように読みました。しかし、私見によれば、「カール・シュミットの真空」は却って彼が無視するディアレクティカの過程を通じてしか得られない、さきに（どうでもよい形で）決定しておいていざenforceしようと様々な手立てを講じてみても、むしろ混乱を招くだけであり、戒厳権力でさえ迂回されざるをえない、意外であるかもしれないが、議論の特定の構造が真の「主権」を生む、というのが私の考えです。多くの人には私が転倒しているように見えるでしょうが、私にはカール・シュミットの転倒は明らかであるように見えます（但し、カール・シュミットの側で用意される装置、特に儀礼性に依拠する部分、については、和仁陽『教会・公法学・国家―初期カール・シュミットの公法学』、東京大学出版会、1990年が決定的に重要で、他方、儀礼性と政治との複雑な関係については拙著で殆ど至るところで触れました）。議論のこの特定の構造は、決して単に合意をとりつけたり正統性を調達するためのものでなく、透明な空間を創り出すためのものでもあります。

第三に、権力の問題。勿論、御指摘の通り「権力」の概念から論じなければならず、到底私の手に余る問題ですが、この語を使いこの視角から考えた部分は拙著には無いので、ここで

も、早稲田におけるより一層丁寧な答えを用意する必要を感じます。

『政治の成立』に即して言うと、権力の問題が理論的に処理されているのは、まず、パラデイクマという概念を樹立する段階においてです。「或るパラデイクマに人々が従う」作用を問題とし、結局は社会構造を見る、そのときに実力、軍事化等々（「無分節」原理）と交換・利益誘導・権威配分等々（「枝分節」原理）の二類型を設定することを試みています。言語は既にパラデイクマと密接な関係を持ち、こうしたメカニズムの無媒介発動をコントロールする可能性を秘めています。「権力」は、従って、パラデイクマの概念そのものの中に、そして次にこうした社会学的メカニズムの中に存在します。政治は、まさにこのメカニズムを解体することをその概念内容とするということになります。しかし、無にするのではない。料理してしまう。従ってパラデイクマの作用そのものは残っているわけです。そしてこれをくぐった後は、「権力」はこの同じ語をあてるのがよいのかわからないほど異なるものになっていると考えます。それでも解体されつつ残るものについて例えばローマの政治システムは繊細な区別（分解形式）を識っていて、周知のimperium, potestas, auctoritas等々の語彙を生み出します。

とはいえ、議論による決定にどういうわけか皆が従うとき、そこに権力があるではないか。確かに言語の或る高度の使用によって社会学的権力は解体されている、しかしその言語の使用の結果になお従わない者に対してはどうか。そもそも政治システムを破壊する者に対して発動される刑事手続があるではないか。

第一に、政治システムはそれ自体を破壊する決定を厳格に排除しており、そしてまさにそのことの内容の一つに、「政治システムそれ自体を破壊することへの対応」以外のことは決定しえない、決定すれば自由の侵害になり、それ自体政治システムそれ自体を破壊することになる、ということがある。従ってこの意味の自由の側に立つ限り権力は意識されず、むしろ政治が無いことが権力に服することを意味する。従って、厳密に弾劾主義的な刑事手続以外では権力が問題とされない。そのうえ、現実にはなお反対する者は出ていってしまう。流動性、国際的多元性については書きませんでしたが。

第二に、それでもなお、政治的決定に抗しなければならないときがありはしないか。しかしこの問題は実はデモクラシーの問題です。ぎりぎりに正当化された政治的決定のその内部にさらに限界を設ける、という問題意識がデモクラシーの段階で登場します（ギリシャ悲劇のkratos批判）。政治的決定といえども市民社会にはただちには入ってこれない。しかし逆に、権力の問題はここでは二重に処理されている。市民社会自体が権力を「料理」してしまっている、その上で政治システムがなお「料理」する。近代の分厚い市民社会のあるところでは、買収もクーデタも現実的ではない。そのなかにさらに経済権力や社会権力を見ることは自由であり、また重要ですが、わたしにはむしろ市民社会の罪というよりは市民社会のほころびであるように思えます。いづれにしても根こそぎの議論は却って混乱を招くと思います。まさに川出モンテスキュー論（川出良枝『貴族の徳、商業の精神—モンテスキューと専制批判の系譜』、東京大学出版会、1996年）に触発されて『G.V.Gravinaのための小さな覚え書』（『国家学会雑誌』111巻7·8号、1998年）で触れた問題です。

第七回政治思想学会開催のご案内

期　日：2000年5月27日（土）、28日（日）
会　場：大東文化大学（板橋校舎）

プログラム

5月27日（土）

12:00～13:00　理事会
13:00～16:30　研究会1「自由論題」
　セッション　1　「ヨーロッパ政治思想」（報告3名）
　セッション　2　「日本政治思想」（報告4名）
　セッション　3　「現代政治思想」（報告3名）
16:30～17:00　総会
17:00～19:00　懇親会

5月28日（日）

9:30～12:30　研究会2「初期近代の再検討」（報告4名）
12:30～13:30　理事会
13:30～14:00　総会
14:00～17:00　研究会3「テクノロジーの新展開と規範理論」（報告4名）

第七回政治思想学会研究会「自由論題」5月27日（土）13:00～16:30

セッション1	司会者	田中　治男（成蹊大学）
A　「宮廷」の政治学 ——「ユートピア」と「リヴァイアサン」の間		木村　俊道 （東京都立大学）
B　内乱後のジュネーヴ共和国と『社会契約論』		小林　淑憲 （放送大学）
C　マックス・ヴェーバーの国家観の変化 ——「死」の意味をめぐって		内藤　葉子 （大阪市立大学大学院）
	討論者	吉岡　知哉（立教大学） 菊池　理夫（松阪大学）
セッション2	司会者	栄沢　幸二（専修大学）
D　自由民権運動と義民伝承 ——国民国家形成期における「物語」の再構築をめぐって		金井　隆典 （日本学術振興会　特別研究員）
E　北一輝の国際秩序像		佐藤　美奈子 （東京大学大学院）
F　＜他者＞はいかにして排除されるか ——戦間期日本の女性をめぐる議論から		林　葉子 （同志社大学大学院）

G　30年代日本の学問研究における　今井　隆太
「生活の基本原理としての政治」　(早稲田大学大学院)
討論者　宮村　治雄（東京都立大学）
出原　政雄（志学館大学）

セッション3　司会者　寺島　俊穂（大阪府立大学）

H　政治と虚偽　石田　雅樹
——ハンナ・アーレントの虚偽への考察を中心に　(筑波大学大学院)

I　プルーラリズムの現在　岡田　憲治
——R・A・ダールとラディカル・デモクラシーとの交錯　（立教大学）

J　フェミニズムに還元されないジェンダー政治理論は可能か　坂本　洋一
(成蹊大学)

討論者　杉田　敦（法政大学）
斎藤　純一（横浜国立大学）

研究会2　5月28日（日）9:30～12:30　「初期近代の再検討」
司会者　半澤　孝麿（和洋女子大学）

K　グロティウスと初期近代世界（仮題）　山内　進
(一橋大学)

L　「インド問題」Colonialismと主権国家　太田　義器
——ビトリアとグロティウスの政治思想　(摂南大学)

M　人文主義とモンテーニュ　宇羽野　明子
(近畿大学)

N　中国「近代」思想史の問題系　伊東　貴之
——朱子学の「成功」とその蹉跌　(武蔵大学)

13:30～14:00　総会

研究会3　14:00～17:00　「テクノロジーの新展開と規範理論」
司会者　小野　紀明（京都大学）

O　現代科学論と政治哲学　野家　啓一
(東北大学)

P　情報化とデモクラシー　川岸　令和
(早稲田大学)

Q　生命倫理と政治　田中　智彦
(東京医科歯科大学)

R　エコロジーと政治　千葉　眞
(国際基督教大学)

・懇親会参加費はお一人3500円です。当日受付にて申し受けます。
・昼食について　27日は大学の食堂が営業しております。また、近辺のファミリー・レストランなどの地図を当日お配りします
本年度は大会開催校では特に昼食の手配をいたしませんのでご注意ください。
・控え室にてお茶などを用意しております。ご利用ください。
研究会の司会と報告者の方の控え室は、当日ご案内いたします。
・その他、ご質問などは、会場責任者の和田守までお問い合わせください。

政治学科事務室　03－5399－7378　　FAX　03－5399－7379
自　宅　　0492－31－3804　　FAX　0492－32－3948

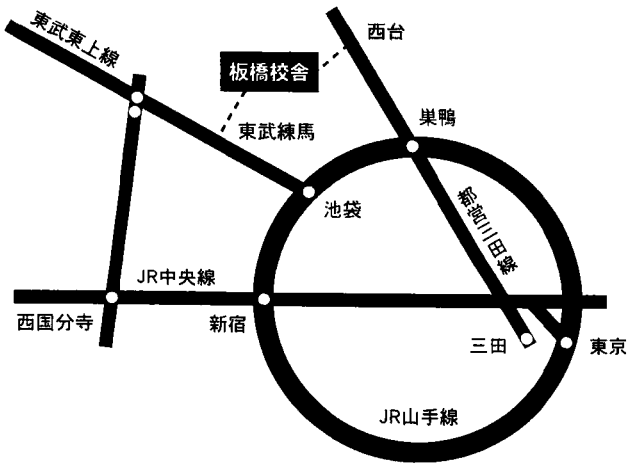
会場（大東文化大学）へのアクセス

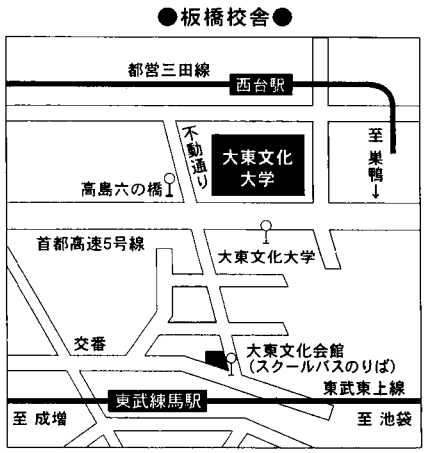
東武練馬駅からのバスについて
27日は駅前の大東文化会館からスクールバスが出ております。

11	00	15	30	45
12	00	20	30	45
13	00	15	30	45
14	00	15	30	45
15	00	15	45	
16	20	50		

総会・懇親会終了後は専用バスを用意いたします。
28日は大東文化会館と大学間の専用バスを用意いたします。
なお、タクシーご利用の方は、駅前からほぼ基本料金で大学に着きます。

●東武東上線東武練馬駅下車（池袋発　普通電車　7つ目の駅、池袋より約15分）スクールバス5分
●地下鉄都営三田線西台駅下車（巣鴨駅より9つ目の駅、巣鴨より約17分）徒歩10分
●路線バス（国際興業バス）高島六の橋下車（東武練馬駅⇔浮間舟渡駅）
大東文化大学下車（成増駅北口⇔赤羽駅西口）





論文公募のお知らせ（2000/4/28）

学会誌『政治思想研究』の編集委員会では、現在、2000年5月の刊行を目指して創刊号の編集作業に従事しています。9月10日に締め切った論文公募には、7編の応募がありました。投稿して下さった諸氏に感謝いたします。引きつづき次号の刊行が2001年5月に予定されており、それに掲載する論文を下記の条件・要領で公募します。ふるってご応募下さい。

記

1. 応募時点で、応募者が本会の会員であることを条件とする。

2. 応募論文は未公刊のものに限る。（インターネット上で他者のコメントを求めるために発表しているものは応募できる。）

3. 応募希望者は、2000年6月10日までに、応募しようとする論文の題目と内容の要旨（A4要旨1枚程度）を下記の編集委員会（小野研究室気付）宛に送付し、予め応募の意思を示すものとする。雑誌刊行に支障をきたさないためには、応募原稿がどの位あるかを事前に把握しておくことが必要なためである。会員諸氏のご協力を得たい。応募の意思表示者に対しては、編集委員会から「応募用紙」「フロッピーデータ内容連絡表」（下記参照）を送付する。

4. 原稿の締め切りは、2000年8月31日、提出先は〒606－8501　京都市左京区吉田本町、京都大学法学部　小野紀明研究室気付　『政治思想研究』編集委員会とする（直通Tel.075－753－3263、法学部庶務係Fax.075－753－3290）。この締め切り期限までに応募された原稿は上記3の手続きをとっていない場合でも受け付ける。

5. 原稿の応募に際しては、学会事務局ないし編集委員会で用意している「応募用紙」（インターネットでの送付も可）に所定の事項を記入の上、A4用紙1枚程度のレジュメを添付した論文2部を提出する。応募用紙にある執筆者略歴欄には、氏名、生年、博士以上の学位、現職、主要業績数点（論文の場合は掲載雑誌名と巻号、年月。著書の場合は出版社と刊行年）を150字以内で書くものとする。

6. 原稿の字数は注の部分を含めて32000字以内とする（厳守のこと）。ワープロ、コンピュータを使用する場合は、一行30字の一ページ20行で、行間を広くとってプリントアウトする（縦書でも横書でもよいが、組版は横組となる）。打ち出した原稿に添えてフロッピー（使用機種、使用ソフト名をラベルに明記の上、マッキントッシュやワープロの場合でも、MS－DOSでフォーマットしたフロッピーに、オリジナルの原稿ファイルに加えて、テキストファイル形式のファイルも添付する）を提出する。手書きの原稿用紙も可とするが（200字詰めの場合160枚以内、400字詰めの場合80枚以内）、ワープロ、コンピュータ原稿が望ましい。

フロッピー入稿時の注意

※フロッピーの入稿に際しては、学会事務局ないし編集委員会で用意している「フロッピーデー

タ内容連絡表」に記入の上、添付すること。

※改行の場合には、必ず改行マーク（通常はリターン・キー）を入れること。見た目だけの改行では改行と認識されないので注意する。

※テキスト・ファイルには、外字、記号、文字装飾情報は含まれないので、それらに関しては、プリントアウトした原稿に朱書で明示すること。パソコンやワープロで出力できなかった特殊な漢字や記号についても同じ。

7. 見出しは、大見出し（ローマ数字Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）、中見出し（アラビア数字1,2,3）、小見出し((1),(2),(3)) とする。さらにより小さな見出しとして（i、ii、iii）などをつけることもできる。章、節、項は使わない。

8. 注は各見出しごとに、注(1)(2)(3)....と入れ、プリントアウト上に朱書して明示する。

9. 引用・参考文献の示し方

1. 洋書単行本の場合
   K. Marx, Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie, Dietz Verlag, 1953, SS.75－6.（高木監訳『経済学批判要綱』(1)大月書店、1958年、79頁)。
2. 洋書雑誌論文の場合
   F.Tokei, Lukacs and Hungarian Culture, in The New Hungarian Quarterly, Vol.13, No.47, Autumn 1972. p.108
3. 和書単行本の場合
   丸山真男『現代政治の思想と行動』第2版、未来社、1964年、140 1頁。
4. 和書雑誌論文の場合
   坂本慶一「プルードンの地域主義思想」、『現代思想』5巻8号、1977年、98頁以下。
5. テキストファイルの場合、イタリックの書式情報は認識されないので、プリントアウト上に赤のアンダーラインを引き、明示すること。

10. 応募された論文は編集委員会において、外部のレフリーに委嘱した評価の判定をふまえて慎重に審査し、掲載の可否を決定する。応募者には結果を通知する。この間、編集委員会より原稿の手直しを求めることがある。なお応募原稿は返却しない。

11. 校正は印刷上の誤り、不備の訂正のみにとどめ、校正段階での新たな加筆・訂正は認めない。

12. 応募論文が本誌に掲載された後、他の公刊物に転載される場合には、予め本誌の編集委員会に転載許可を求めることとする。また転載の際には初出が本誌である旨を明記するものとする。

以上

『政治思想研究』編集委員会

2000年4月28日　発行人　中谷　猛　　編集人　宮村治雄

政治思想学会事務局　郵便振替番号 00190－7－571218

108-8345　東京都港区三田2－15－45　慶応義塾大学法学部

鷲見誠一研究室気付

電話　03－3453－4511（大代表）　fax　03－3798－7480